

二〇一六年度 一般入試A日程

国 語

〔注意事項〕

1. 試験開始の合図があるまで、問題冊子の中を見てはいけません。
2. 問題冊子は31ページ、解答用紙はマーク・シート1枚です。監督者の指示に従って確認しなさい。
3. 問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
4. マークは、マーク・シートに記載してある「記入上の注意」をよく読んだうえで、正しくマークしなさい。
5. 受験番号及び氏名は、マーク・シートの所定欄に正確に記入し、また受験番号欄の番号を正しくマークしなさい。
6. 監督者の指示があつてから、マーク・シートの左上部にある「科目欄」に受験する科目名を記入しなさい。
7. 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

# 国語

(60分) 100点 (解答番号)

1

46

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(40点)

水澄ましが、すいと水面を動いて、石臼の縁で止まった。

かすかに立った波紋で水面に映り込んでいた春の月が揺れた。水澄ましは身体を固くして、細い足で水をかかえ込んでいるふうに見えた。

「驚いたか……」

高比良芳美は口元に微笑を浮かべ、こんな夜半に突然目覚めさせられ、戸惑ったようにしている虫に呟いた。<sup>(1)</sup>

ひとかかえほどの大きさの臼の水面で、春の月がゆつくりと半月のかたちを整えていく。石臼に生えた苔の緑色と月の白色が小鉢に盛った大根のようで、良い具合におさまっている。

美しいものだ、と高比良は思った。この石臼を庭の濡れ縁の隅に置いたのは、三年前の秋に亡くなった妻の良枝である。石臼は銀婚式の記念で二人して出かけた九州・唐津のがらくた屋で買い求めた。店の軒先に放り出されていた、半ば黒ずんでいた石臼を、珍しく良枝が見入っていた。

どうした、餅でも搗こうというのか、と高比良が笑って声をかけると、良枝は目をしばたかせて首を横に振った。そうしてがらくた屋を離れてしばらく歩いたところで、妻は急に立ち止まり、

「あなた、あの臼を買ってもよろしゅうございますか？」

と妙にはっきりした口調で言って、高比良を見上げた。南国の陽差しの中で、良枝の顔がまぶしかった。

「かまわないが、あと二日、臼との旅は重いぞ」

高比良が言うと、良枝は鼻に皺しわを寄せるようにして笑い、店の入り口に配達致しますと書いてございました、と言った。

良枝は結婚して以来、贅沢ぜいたくをしなかった。一流企業に勤めているとはいえ、出世には無縁の高比良の収入を考えてくれてか、二人の娘を無事に育て上げ嫁に出すまで、金銭のことで一度たりとも夫に

(2) をかけたことはなかった。

世渡りが下手な夫を持つて可哀相かわいそうだと思つた。不器用であつた。会社の人間が自分のことを、そう呼んでいるのも知つていた。それよりも当人が、自分の不器用さを一番わかつていた。

この石臼を庭先で束子たわしを手に何日も洗つていた良枝のうしろ姿が浮かぶ。妻が何かを欲しいと言ひ出したことも珍しかった。ただの汚れた石の塊にしか思えない臼を懸命に洗つている妻が、高比良には奇妙(3)に思えた。

それでも春になり、石臼に水を入れ、水草を浮かべ、そこに白いちいさな花があるのを見つけた時、高比良は妻の懸命なうしろ姿が、この可憐かれんに咲いた花卉のためにあつたのだとわかり、胸の中が清らかに洗われた気がした。

今、目の前にある臼の中に春の月が浮かんでいるのを伝えてやれば、どんな顔をするだろうか。高比良は頬を水につけるように覗のぞかせている妻の横顔を想像した。その想像がせんなきこととわかつていても、ここは二人の人生がはじまつた場所であり、濡れ縁の板一枚、柱一本、庭の木々、草の一片でさえ、彼女の手が触れ続け、大切に守つてくれていたものである。

——こんな夜半、まさか私が眠れずにいるとは良枝も思ひはしなかつたろう……。

高比良は胸の中で呟き、軒にかかる月を見上げた。

皓々こうこうと光を放つ春の半月は人の肌のように透き通つていた。

「明日も天気は良さそうだ……」

高比良は言つてから、

「いや明日で、終わるのだ」

と言ひ直した。

高比良は明日、四十三年間勤めた会社の定年(5)タイシヨクの日を迎える。彼は立ち上がり、大きく息を吸つた。春風の中に甘い

匂いがした。

(6)「ともかく明日は晴天だ」

高比良は明日のテンコウが良いことが嬉しかった。もう一度月を見直すと、月影に、丘の上に聳える一本の木の姿が重なった。高比良が、いつか、その木の下に立ち、佇んでみたいとひそかに思い続けていた木であった。

翌朝、高比良は目覚めると、簡単にこしらえた食事を手早く済ませ、いつもより一時間早く鶴見の家を出た。

住宅街の中を抜け、線路沿いの道をゆつくりと駅まで歩いた。四十年間休むことなく通った道であった。当時とは街並みはまるで違っている。ほどなく駅へ出るガード下をくぐると道は三股の交差点になっていて、そこにちいさな御堂があり、地蔵が一体祀られていた。

高比良は交差点の横断歩道を歩きながら、その御堂を見た。地蔵だけはずっと変わらずにある。十年近く前に工事車輛がぶつかつて御堂が毀れたことがあって、傾いたままの地蔵が雨に晒されたが、しばらくしてトタン板を折り曲げた屋根が掛けられた。誰か、この地蔵を大切にしている人がいるのだと、粗雑な屋根ひとつに気持ちがなごんだ。ほどなく御堂は作りかえられ、地蔵はその中におさまっている。

高比良が、この街に家を持ったのは、会社の先輩であった岡崎豊治の薦めによるものだった。岡崎は会社の創業時よりいる総務の責任者で、工業機械の会社へ、理工系出身ではない高比良の採用を推してくれた上司であった。(8)

入社して三年目に高比良は叔母の世話で、ミシン会社の経理部で働いていた良枝と見合いをし結婚することになった。そのホウコクを岡崎にすると、鶴見に開発中の住宅を購入することを薦めてくれ、住宅購入の手続き、銀行からの借入れ、返済計画まですべてを、岡崎はやつてくれた。

「蒲田の寮から通うことに比べたら決して近くはないが、多摩川を越えていても三年もすれば、ここら一帯は恰好な通勤圏になるはずだ。それにまず家を持てば、男の仕事は落ち着いて構えられる」

戦前は満州鉄道で働いていたという岡崎は、入社試験の面接の時、高比良の履歴書に書かれた満州生まれのことを質問した。そのことが高比良の採用にどう影響したかはわからないが、高比良は岡崎のいた総務部へ配属された。

「高比良君、この会社はこれから伸びるよ。<sup>(10)</sup>今はまだ町工場に毛が生えたような会社だが、柴田社長が技術畑なのがいいんだ。これからどんどん若い人材が入ってくれば、きつといい会社になる。私たちの仕事は彼等が仕事に専念できるように見守ってやることだ」

岡崎の言葉どおり、高比良が入社した年から会社は年毎にギョウセキ<sup>(11)</sup>を伸ばし、成長していった。岡崎は入社してきた社員の面倒を、父親のように見ていた。(12)社員もいたが、会社は技術者の社長の情熱に引きずられて夜遅くまで働くことを苦にしない社員がほとんどだった。

今でこそフレックス・タイムという、本人が勤務時間を定めて、自宅で働く社員までいるようになったが、当時は研究所で寝泊まりする社員も多く、総務の仕事のひとつに彼等の夜食や朝食をジュンビ<sup>(13)</sup>することがあった。

社長の柴田寛もそうだったが、高比良が見ている、技術者たちにはいったん職場に入ると、地位や年齢の(14)を取り払って、皆でひとつの目標にむかって行く仲間意識のようなものが感じられた。その様子を見ていて、高比良は羨ましくもあり、時間や労力を惜しむことなく仕事に専念する彼等とともに働いていることを誇らしくも思った。

「連中の頭の中には、私たちとまるで違うものが詰まっているかわかるかい？」

岡崎が研究員たちの夜食を買いに行く夜径<sup>よみち</sup>で高比良に聞いたことがあった。

「何でしょうか？」

「未来だよ。今すぐには役立たないように思えるものでも、彼等にはそれがどんなに素晴らしいものになるかが見えるんだよ。彼等は夢を夢でなくするんだ。偉い連中だ……」

岡崎はまだ美しい星がきらめいていた時代の東京の夜空を見上げて言った。

「けど他のことはからつきしだめだ。放つて置けば一年だって二年だって同じ作業服を着ている男たちだし、あれじゃ嫁を探す

暇もない。その連中を一人前の社会人にするのが私たちの仕事でもあるんだよ。彼等は未来を見て、私たちは会社の今日のことを見て、一緒に夢にむかつて行くんだ。いい仕事だと思わないか」<sup>(15)</sup>  
若かった高比良には岡崎の横顔がひどくまぶしく映った。

(伊集院静「陽だまりの木」より)

問1 傍線部(1)・(4)・(8)の本文における意味として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

1

3

(1) 戸惑った

1

- ① 怒った
- ② 驚いた
- ③ あせった
- ④ まごついた
- ⑤ ぼんやりした

(4) せんなき

2

- ① かいがない
- ② やむを得ない
- ③ ありえない
- ④ 期待外れな
- ⑤ 感傷的な

(8) 推して

3

- ① 予想して
- ② 祝って
- ③ 隠して
- ④ 画策して
- ⑤ すすめて

問2 空欄番号

(2)

(12)

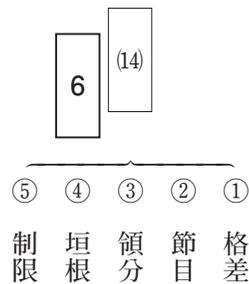
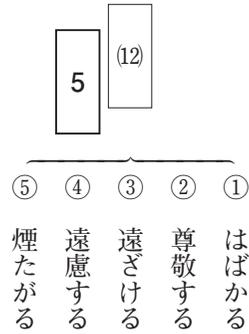
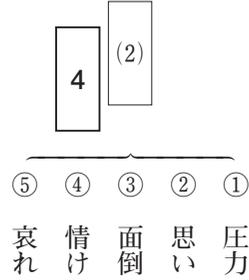
(14)

に入る語として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一

つずつ選びマークしなさい。

4

6



問3 傍線番号(3)「奇妙に思えた」とあるが、その理由として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

7

- ① 高比良には、妻が熱心に洗っている石臼の価値がわからず、妻の行動が無意味に思えたから
- ② ただの汚れた石の塊にしか見えない石臼を懸命に磨く妻の姿に、高比良は感謝の気持ちが起こったから
- ③ 長い間の汚れがたまった石臼は、どれだけ洗っても無駄できれいになりそうもないと考えたから
- ④ 妻の欲しがった石臼に興味のなかった高比良には、妻が何のために臼を洗っているのか、わからなかったから
- ⑤ 汚れた石の塊としか思えない臼を洗っている妻の行動が、自分の死を見越したものに思えたから

問4 傍線番号(5)・(7)・(9)・(11)・(13)と同じ漢字を使う語を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

8

12

(5)

タイシヨク

8

- ① 家のチンタイ契約を結ぶ
- ② 土にタイヒを入れる
- ③ 景気がテイタイする
- ④ 不俱ふぐタイテンの敵
- ⑤ 敵軍をゲキタイする

(7)

テンコウ

9

- ① 鉾山のコウドウを進む
- ② 身柄をコウソクする
- ③ シュコウしがたい話
- ④ センコウ花火を楽しむ
- ⑤ 建設コウホ地を探す

(9)

ホウコク

10

- ① ホウカツ的な見解を述べる
- ② カホウは寝て待て
- ③ この市場はホウワ状態だ
- ④ サイホウ道具を購入する
- ⑤ やさしくホウヨウする

(11)

ギョウセキ

11

- ① 偉人のジセキを伝える本
- ② インセキ関係にある
- ③ 学校をジョセキされる
- ④ 先人のキセキをたどる
- ⑤ 船に荷物をセキサイする

(13)

ジュンビ

12

- ① 構内をジュンカイする
- ② シツジュンな土地
- ③ 評価キジュンを定める
- ④ 警察官がジュンシヨクする
- ⑤ 条約をヒジュンする

問5 傍線番号(6)「ともかく明日は晴天だ」とあるが、このときの高比良の気持ちを説明したものととして、最も適切なものを、

次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

13

- ① 定年を迎えるにあたって感傷に浸る気持ちから、最後まで無事に勤め上げようという気持ちへ切り替えている
- ② 定年を迎えることに気持ちが高ぶっていたが、とにかく明日の天気のことを考えて落ち着こうとしている
- ③ 自分の会社生活を振り返って甘美な思い出に浸りつつ、天気も自分を祝福するように晴れることを喜んでいる
- ④ 世渡りが下手で出世には無縁だったので会社に不満もあつたが、定年を清々しい気持ちで迎えようとしている
- ⑤ 定年後のことをあれこれ思い悩むよりも、明日のことだけを考えて沈んだ気持ちをごまかそうとしている

問6 傍線番号⑩「この会社はこれから伸びるよ」とあるが、岡崎がこのように言うのはなぜか。その理由として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

14

- ① 高比良を誘った以上、弱気な発言をするわけにもいかず、世の中全体の景気拡大に賭けていたから
- ② 社長がそもそも技術者であり、若手の社員も技術者を中心であったところへ、畑違いの高比良が入ってきたから
- ③ 自分の持つ満州鉄道での経験が、満州生まれの高比良を通して会社内で、いかに発揮できると思ったから
- ④ 会社全体が仕事への熱意にあふれているうえに、技術者をサポートしていく仕事に自信と誇りを持っていたから
- ⑤ 社長やスタッフが技術畑の人ばかりで不安だったが、高比良なら裏方として力を発揮してくれそうだから

問7 傍線番号⑮「若かった高比良には岡崎の横顔がひどくまぶしく映った」とあるが、それはなぜだと考えられるか。その説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

15

- ① それまでまともに勤めたこともなかった高比良にとって、岡崎は社会というものを教えてくれる父親のような存在であつたから
- ② 柴田や他の研究員の仕事に対する情熱やそれを支える自らの役割に誇りを持って働く岡崎の姿勢に、新人の高比良も心を打たれたから
- ③ 技術系の企業にもかかわらず理工系出身でない自分を採用し、さらに仕事の心得まで伝授してくれる岡崎に感激しているから
- ④ 岡崎の語る総務という職務のありようは、それまで見出せ<sup>みい</sup>ず<sup>だ</sup>にいた自分の仕事の意味を明らかにするものであり、仕事への自信につながつたから
- ⑤ 経験の浅い高比良に仕事を教えてくれた岡崎は師匠のようなものであり、その岡崎と一緒に働くことが誇らしく感じられたから

問8 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

16

- ① 出世とは縁がなく、不器用で世渡り下手の夫のことを、良枝は可哀相だと思っていた
- ② 庭先の石臼の水面に映った春の月を見て、高比良は亡くなった妻のことに思いをさせた
- ③ 岡崎は、相手が社長といえども媚びたりせず、高比良をはじめ若手の意見を率直に伝えた
- ④ 岡崎の情熱に引きずられて、若手の社員は夜遅くまで仕事をし、会社は成長していった
- ⑤ 高比良は、皆でひとつの目標にむかって行く姿が羨ましく、技術者の仲間になりたいと思った

問9 この文章の描写に関する説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

17

- ① 亡き妻との思い出や長年勤めた会社での思い出を振り返る様子を、主人公が何気なく目にしたものを手がかりにして描いている
- ② 愛する妻を亡くし、今また生きがいだった仕事からも離れようとしている主人公の、やるせない心情を叙情的に表現している
- ③ 亡くした妻の思い出に耽溺<sup>たんでき</sup>しつつ暮らしている現在と、人生を会社にささげ仕事一筋に生きてきた過去を対象的に描き分けている
- ④ 定年を機に今までを振り返り、懐かしさと寂しさを感じた主人公の複雑な内面を、石臼や水澄ましなどの存在を通して描いている
- ⑤ 妻との思い出を「石臼」「月」など静的なもの、会社での思い出を「情熱」「目標」など動的なもので対比させて独特の表象世界を作り出している

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(40点)

日本の犯罪率が低いのは、そこに「世間」における「ゆるし」と「はずし」の力学が作動しているからである。

小宮さんは、日本の集団においては、<sup>(1)</sup>ウチとヨソ(ソト)を分離し、ウチ世界において「存在論的安心」を得るかわりに、さまざまな細かい抑圧的ルールに従うことによつて、自己抑制をなしとげることが、犯罪抑止力となつているという。これにたいして、西欧においては、集団が個人の特性による結びつきによつてつくられていること、内部のルールが弱いこと、行動の自由を重んじているために、犯罪抑止力を弱めているという。

<sup>(2)</sup>つまり日本人は、ウチの集団から排除されなため、きわめて几帳面きちょうめんに沢山のルールを守っている。そのことで集団からの庇護ひごを受け、「存在論的安心」を得ることができる。そうして犯罪防止の力を内面化することに成功しているとする。

日本で犯罪にはしる可能性がもつとも大きいのは、ヨソに排除されたときである。しかし日本人は、ウチ世界から排除されないようにつねに他人の視線を意識しているために、ヨソに排除されることは稀まれであるという。

これにたいして西欧の集団においては、ウチとヨソの区別がなく、集団は社会と通底(3)しているために、日本の集団におけるような細かいルールが作動しないし、自己抑制をおこなう契機がない。つまりルールよりも個人的自由のほうに価値が置かれる。そのため、犯罪を抑止する契機が集団に存在しない、と。

それゆえ、日本では、西欧でノーマルな行為とみられるものでも、逸脱とみなされる。ましてや西欧でも逸脱とみなされる行為は、つよく否定される。つまり小さな犯罪でもみのがされないと小宮さんは語る。

そして、西欧においては、日本のようなウチ世界における非公式なルールが存在しないから、犯罪抑止政策は、個人の責任がイネンを重視し、犯罪がおきたあとの処罰に頼ることになる。しかし、日本において、犯罪抑止は、犯罪がおきる前に、ウチ世界における非公式ルールによる予防に重点が置かれる、と。

この小宮さんの議論を読んでいると、まるで日本(5)の「世間」では、とうの昔に「割れ窓理論」を実践しているかのように見え

てくる。「フクソウ」の乱れは非行のはじまり」などとよくいわれるが、「世間」は、法律には書いていない細かなルールを日常的に発動し、人に守らせることによって、つねに犯罪発生を予防しているのだ。

この点で河合さんが、つぎのような面白いことをいつている。

すなわち、諸外国と比較しても、防犯という意味では日本は無防備だといってよいが、盗むのは容易でも、じつは盗んだものが使えない。なぜかといえば、日本の世間は、だれかが人知れず金持ちになることを許してくれないからである。だれがどの程度収入があるかは、隠せないのである。<sup>(7)</sup>

こうしたなかで警察は、最近近辺で金遣いが荒くなった人物を探して「オマエダロ」とやる。つまり、世間の力と警察力が連携することによって、諸外国とは桁違いに犯罪の少ない社会が保たれている、と（『終身刑の死角』<sup>注3</sup>）。

「世間」が人知れず金持ちになるのを許さないのは、「共通の時間意識」があるためである。「共通の時間意識」は個人の不在と人間平等主義を意味するから、ちよつとでもまわりとちがう人間がいると、「出る杭は打たれる」ということになる。

しかし「世間」には、経済的なものをはじめとして格差が厳然と存在する。しかも、「身分制」という「世間」のルールも存在する。そのために、「世間」はロコツな格差やキョウソウは隠蔽しようとする。しかし意識としての人間平等主義と、現実としての「身分」（格差）との間に「ねじれ」が生じ、そこから独特の「妬み」の意識が発生する。

アメリカなどでは高額の宝くじを当てたようなときに、堂々実名でメディアに登場して、「お金は両親にあげたいです」なんて笑顔で語っているシーンがよくある。しかし、日本の宝くじの高額当選者が絶対に名前を明かさなないのは、明かしたとたんに「世間」からひどく妬まれ、とんでもなく不利な状態に置かれることがわかっていからである。

そのために、お隣の人間がいきなり金遣いが荒くなつたりすると、もともと「世間」にあった「妬み」の意識に目覚め、お隣のことをいろいろ詮索しはじめる。場合によっては警察にチクる。つまり盗んだお金は、うっかりつかえないのだ。

この場合「お金持ちになる」ということは、「出る杭」になるということであり、「世間」から「はずされる」可能性が生まれる。〈世間・内・存在〉であり続けるためには、「世間」のルールを守り、ハデにお金をつかったりしないで「(11)」に生

きることが大事である。このような「世間」のルールをみんな内面化しているために、それが犯罪抑止力になりうるのだ。  
さらに河合さんはいう。

殺人を犯した刑務所からの出所者の行き先を調べた調査によれば、数十件中の一件、大地主の人物を除いて、全員が出身地に帰れず、その家族ごと(12)キョウを出ている。つまり、犯罪者は世間から家族ごと永久追放になっている。欧米の刑罰思想からいえば、刑罰は適正な手続きを通じて、裁判で国家によってしか科すことができない。それなのに、世間がいつまでも犯罪者を懲らしめ続けるのは、法学の考え方からすればとんでもないことである、と（『終身刑の死角』）。

これは「世間」のルールとして「呪術性」というものがあるために、犯罪者はケガレたものとみなされ、法的に罪をつぐなっていくように、〈世間・外・存在〉として「はずされ」、排除されることを意味する。

(13) 犯罪をケガレと考える意識は、きわめて古い時代の意識であるといえる。古い時代の共同体は、科学技術が発達している今日とはちがって、自然災害や飢饉(きん)などの不測の事態によって、人々のつながりが簡単に壊れてしまうような(14) さをもっていた。そのため犯罪も、たんに個人の利益を侵害する行為ではなく、人々の間の絆(きずな)を汚し、共同体の秩序を崩壊させる行為としてとらえられた。すなわち、犯罪が共同体の絆を棄損するケガレととらえられたのである。そして、犯罪者を処罰することによってはじめて、ケガされた共同体の秩序が回復すると考えられた。

ヨーロッパ社会でも古い時代には、こうした犯罪をケガレととらえる呪術的な意識が存在していた。しかし、一二、三世紀以降キリスト教の支配とともに、キリスト教の教義に反する呪術的な俗信・迷信が否定され、こうしたケガレの意識も否定された。日本にケガレの意識がのこったのは、このようなキリスト教の支配の歴史がなかったからである。

(15) 日本ではこのように犯罪がケガレとしてとらえられるために、犯罪者の親族などの関係者や、犯罪者に関係するモノまでもが、忌むべきケガレとみなされる。これが近代以前には、集団責任としての縁座責任・連座責任としてあらわれたのである。

近代刑法は、このような集団責任の原理を否定し、個人責任の原理を確立して、犯された犯罪の責任を個人に(16) ゲンテイした。

(17) 、日本の「世間」においては、現在でも古いケガレの意識が「呪術性」としてのこっているために、一種の縁座責任・

連座責任として、家族にもその責任が及ぶのである。近代刑法の原理から考えれば、家族にはなんの責任もないのだが、それは「世間がゆるさない」のである。

河合さんもいっているが、このような「世間」の厳罰志向は今にはじまったものではなく、伝統的なものである。最近とくに「世間」が犯罪者にたいして厳しくなり、そのために厳罰化が生じたわけではないのである。

(佐藤直樹『なぜ日本人はとりあえず謝るのか』による)

(注1) 小宮さん——犯罪社会学の小宮信夫。

(注2) 河合さん——法社会学者の河合幹雄。

(注3) 『終身刑の死角』——河合幹雄の著作。

問1 傍線番号(1)「ウチとヨソ(ソト)」とあるが、日本の集団における「ウチ」と「ヨソ」のあり方として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。 18

- ① ヨソにおいては、集団は個人の責任を重視して社会のルールの遵守を求めない
- ② 個人が重んじられるヨソにおいては、ウチのルールが行動の自由を規制するものとして否定される
- ③ ヨソにおいては、犯罪対策として犯罪がおきたあとの処罰に重点がおかれ、予防は後回しにされる
- ④ ウチで逸脱として否定される行為は、ヨソにおいてはノーマルな行為として受け止められている
- ⑤ ヨソと分離したウチの細かいルールによる自主規制が結果として犯罪防止となっている

問2 傍線番号(2)・(3)・(8)・(9)・(15)の本文における意味として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。 19 ～ 23

- ① 監視を受けて
  - ② いたわり守られて
  - ③ 助けを借りて
  - ④ 加勢を受けて
  - ⑤ 認可を得て
- (2) 庇護を受け 19

(3) 通底している

20

- ① 基本的な部分で共通性を持っている
- ② 互いに反対の関係にある
- ③ 内容の類似性がみとめられる
- ④ 矛盾なく最初から最後まで一貫している
- ⑤ 道理に反してひそかに通じ合っている

(8) 桁違いに

21

- ① 目ざす方向が異なり
- ② 間違いなく確かに
- ③ 大きくかけ離れて
- ④ 異なる様相を呈して
- ⑤ 傾向が異なつて

(9) 厳然と

22

- ① 現実に即して
- ② 威厳をもつて
- ③ 長いあいだ変わることなく
- ④ 矛盾がなく整つて
- ⑤ 確固として動かしがたく

問3 傍線番号(4)・(6)・(10)・(12)・(16)と同じ漢字を使う語を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

(15) 忌む

23

- ① 憎悪する
- ② 罪を償う
- ③ 責任を問う
- ④ 嫌い避ける
- ⑤ 恨みに思う

(4) ガイネン

24

- ① ダンガイ絶壁に立たされる
- ② アジア経済をガイカンする
- ③ トウガイ事項を確認する
- ④ 制度がケイガイ化する
- ⑤ つらいキョウガイにある

(6) フクソウ

25

- ① 道路をホソウする
- ② 雪山でソウナンする
- ③ お家ソウドウに発展する
- ④ 映画のソウニユウ歌
- ⑤ 気分ソウカイとなる

(10) キョウソウ

26

- ① 視力をキョウセイする
- ② 絵画をキョウバイにかける
- ③ 法廷でキョウジュツする
- ④ 物語がカキョウに入る
- ⑤ 核のキョウイにさらされる

(12) コキョウ

27

- ① カイコ録を著す
- ② コタンな水墨画
- ③ 部下の士気をコブする
- ④ オンコ知新の気持ちで臨む
- ⑤ コメンにさざ波がたつ

24

28

(16)

ゲン  
テイ

28

- ① ゲンマイ食を実践する
- ② ケンゲンを与えられる
- ③ ザイゲンを確保する
- ④ ゲンカクに悩まされる
- ⑤ カンゲン楽団を編成する

問4 傍線番号(5)「日本の「世間」ではどうの昔に「割れ窓理論」を実践している」とあるが、それはどのようなことか。最も

適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

29

- ① 集団内で独自の決まりが守られているかを細かく監視して、犯罪の発生が予防されていること
- ② 身近な集団の中でも刑法を厳格に適用することで、さらなる重大事件の発生を予防しようとしていること
- ③ 人は本質的に決まりを破るものだと考え、常に隣人を疑うことで犯罪の発生を予防しようとしていること
- ④ 日本ではウチの集団から排除されないように、犯罪者の親族にまで法律に規定のない責任をとらせていること
- ⑤ 集団内部の結束の乱れが外部からの器物損壊を許すと考え、内部の一体感を醸成しようとしていること

問5 傍線番号(7)「日本の世間は、だれかが人知れず金持ちになることを許してくれない」とあるが、その理由として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

30

- ① 「世間」は格差を隠蔽するために、頭角をあらわした人物を詮索し、警察に告発するから
- ② 新たなあらそいを避け、秩序を守るため、「世間」には身分制というルールが存在するから
- ③ 個人の不在と人間平等主義によって、「世間」ではまわりとちがう人間は嫌われるから
- ④ 諸外国と比べると日本の「世間」は狭く、金遣いによって収入が簡単に推測されてしまうから
- ⑤ 法律にはないルールを日常的に発動する日本では、金持ちになると悪事を働いたと見なされるから

問6 空欄番号

つずつ選びマークしなさい。

(11) ・ (14) ・ (17) に入る語として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一

31 (11)

⑤ ④ ③ ② ①

素朴 健康 静粛 丁寧 謙虚

32 (14)

⑤ ④ ③ ② ①

空寂 脆弱 軽薄 磐石 消極

33 (17)

⑤ ④ ③ ② ①

だから しかも だが そうして また

問7 傍線番号⑬「犯罪をケガレと考える意識」とあるが、これはどのような働きをする考え方か。最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

34

- ① 犯罪者に関係するものを排除しないと、共同体が破壊されるという捉え方
- ② 犯罪は予測可能な出来事であるため、犯罪が起こったあとには浄めの儀式が必要だということ
- ③ 自然災害や飢饉などの不測の事態は犯罪者が招き寄せたものであるとする捉え方
- ④ 国家が犯罪者に厳罰を科さないと被害者は浮かばれないという捉え方
- ⑤ 国家が国民の一体性を取り戻すために犯罪者を見せしめにつること

問 8 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

35

- ① 日本の犯罪率が低い要因の一つとして、政府が自己抑制のためのルールを規定していることが挙げられる
- ② 西欧のウチ世界には非公式なルールが存在しないため、逸脱に気づかず、犯罪がみのがされる傾向にある
- ③ 日本人の「妬み」の意識は、「世間」に「人間平等主義」と「格差」が存在するという矛盾から生じている
- ④ 防犯の観点からすると日本は無防備なので、犯罪がおきたあとの処罰に重点を置いた政策が必要である
- ⑤ 日本においては、犯罪をケガレと考える意識が残っているため、近代刑法にも呪術的言葉が盛り込まれている

### 第三問

次の文章は、『讚岐典侍日記』の一節である。堀河天皇に仕えていた筆者は、堀河天皇の死後、喪に服していたが、白河院の命により鳥羽天皇（六歳）に仕えることになった。以下は初めて鳥羽天皇に出仕する場面である。これを読んで、後の問いに答えなさい。（20点）

十二月もやうやうつごもりになりて、「弁の典侍殿のふみ」といへば、取りいれて見れば、「院より、三位殿、大納言の典侍など、さぶらはぬついたちなり。さやうのをりは、さるべき人あまたさぶらふこそよけれ。参るべきよし、おほせられたる」とぞある。いかがせんとて、参らんとぞいそぎたつ。

ついでに夕さりとぞ参りつきて、陣注2いるるより、昔思ひいでられて、かきぞくらさるる。つぼねに行きつきて見れば、こゝ所注1にわたらせたまひたるこちして、その夜は、何となく明けぬ。

つとめて、起きて見れば、雪、いみじく降りたり。今もうち散る。おまへを見れば、べちにたがひたることなきこちして、おはしますらん有様、ことごとく思ひなされてゐたるほどに、「降れ、降れ、雪」と、いはけなき御けはひにておほせらるる、聞こゆる。こはたぞ、たが子にか、と思ふほどに、まことにさぞかし。思ふに、あさましう、これを主とうちたのみまゐらせてさぶらはんずるか、たのもしげなきぞ、あはれなる。

昼注7ははしたなきこちして、暮れてぞのぼる。「こよひよきに、もの参らせそめよ」といひにきたれば。おまへの大殿おほしなみ油あぶらくららかにしなして、「こち」とあれば、すべりいでて参らする、昔にたがはず。御台みだいのいと黒らかなる、御器みぐしなくてかはらけにてあるぞ、見注8ならはぬこちする。走りおはしまして、顔のもとにさし寄よりて、「たれぞ、こは」とおほせらるれば、人々、「堀河院の御乳母めゆ子こぞかし」と申せば、まこととおぼしたり。ことのほかに、見注8まゐらせしほどよりは、おとなしくならせたまひにける、と見ゆ。

（『讚岐典侍日記』による）

(注1) 三位殿、大納言の典侍——どちらも女房。三位殿は天皇の養育係。大納言の典侍は天皇の乳母

(注2) 陣——門にある警護の武官の詰め所

(注3) 御台のいと黒らかなる、御器なくてかはらけにてあるぞ——食物を持った皿などを載せる御台が大変黒々としているのと、ふたのついた椀わんがなくて素焼きの陶器が置いてあるのが。天皇が父母の喪に服す期間の作法

問1 傍線番号(1)・(8)の文法的説明として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

36

37

(1) さぶらふこそよけれ

36

- ① 丁寧の意のハ行四段活用の動詞＋係助詞＋形容詞の已然形
- ② 丁寧の意のハ行四段活用の補助動詞＋係助詞＋形容詞の語幹＋過去の助動詞の已然形
- ③ 丁寧の意のハ行四段活用の補助動詞＋係助詞＋形容詞の已然形
- ④ 謙讓の意のハ行四段活用の動詞＋係助詞＋形容詞の已然形
- ⑤ 謙讓の意のハ行四段活用の動詞＋係助詞＋形容詞の語幹＋過去の助動詞の已然形

(8) 見まゐらせし

37

- ① マ行上一段活用の動詞＋謙讓の意のサ行下二段活用の補助動詞＋過去の助動詞
- ② マ行上一段活用の動詞＋謙讓の意のサ行下二段活用の補助動詞＋サ変動詞
- ③ マ行上一段活用の動詞＋謙讓の意のサ行下二段活用の動詞＋副助詞
- ④ マ行上一段活用の動詞＋謙讓の意のサ行四段活用の補助動詞＋使役の助動詞＋サ変動詞
- ⑤ マ行上一段活用の動詞＋謙讓の意のサ行四段活用の動詞＋使役の助動詞＋過去の助動詞

問2 傍線番号(2)・(9)の口語訳として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

38

39

(2) 陣いるるより、昔思ひいでられて、かきぞくらさるる

38

- ① 御門の陣に車を引き入れると同時に、昔のことを考えてしまつて、恥ずかしくなる
- ② 御門の陣に車を引き入れたときから、昔のことが思い出されて、駆け寄つて行きたくなくなる
- ③ 御門の陣に車を引き入れる前から、昔のことが思い出されて、胸をかきむしりたくなくなる
- ④ 御門の陣に車を引き入れたとき、昔のことが思い出されて、出仕するのが煩わしくなる
- ⑤ 御門の陣に車を引き入れると同時に、昔のことが思い出されて、悲しみにくれる思いである

(9) おとなしくならせたまひにける

39

- ① 穏やかな様子におなりになった
- ② 大人びた様子におなりになった
- ③ 無口な感じにおなりになった
- ④ 周囲を静かにさせなかつた
- ⑤ 落ち着くようにさせなかつた

問3 傍線番号(3)「こと」を漢字に改めたものとして、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

40

- ① 言
- ② 事
- ③ 琴
- ④ 異
- ⑤ 殊

問4 傍線番号(4)「さぞかし」の内容を説明したものとして、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

41

- ① 鳥羽天皇に他ならないということ
- ② たぶん鳥羽天皇であろうということ
- ③ 堀河天皇にかわいがられていたということ
- ④ 堀河天皇が思い出されるということ
- ⑤ 堀河天皇にそっくりであるということ

問5 傍線番号(5)・(7)の本文における意味として、最も適切なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びマークしなさい。

42

43

(5) あさましよう

- ① 愚かなことで  
② 目障りにも  
③ 驚きあきれたことで  
④ みつともなく  
⑤ しみじみと悲しく

42

(7) はしたなき

- ① 失礼な  
② 中途半端な  
③ 落ち着かない  
④ せつない  
⑤ つまらない

43

問6 傍線番号(6)「これを主とうちたのみまゐらせてさぶらはんずるか、たのもしげなきぞ、あはれなる」とあるが、この時の筆者の心情の説明として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

44

- ① 思慮分別のない鳥羽天皇の様子を見ると、堀河天皇と引き比べてしまい、出仕に嫌気がさしている
- ② 年端のいかない鳥羽天皇が、なんとか主君らしくふるまおうとしているのを見て、いじらしく思っている
- ③ 幼い鳥羽天皇の聞き分けの無さを見て、鳥羽天皇を頼りにすることはできないと失望している
- ④ あどけない鳥羽天皇の様子を見て、自分が仕える主君が頼りにならないことに心細さを感じている
- ⑤ 鳥羽天皇の幼稚なふるまいを見て、これが自分の主君かと失望しながらも、仕方がないとあきらめている

問7 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

45

- ① 筆者は院からの手紙により、心をときめかせながら大みそかにはじめての出仕をした
- ② 筆者は宮中に参上し自分の部屋に行き着いたが、そこが自分の居場所ではないと感じた
- ③ 筆者は鳥羽天皇が雪にしゃいでいるのを見て、今は亡き堀河天皇の幼い頃を思い出した
- ④ 筆者は初めて鳥羽天皇の側そばに仕えて食事をさし上げたが、慣れない役割に当惑した
- ⑤ 筆者が食事をさし上げる時、鳥羽天皇は筆者のもとに走り寄ってこれは誰かと尋ねた

問 8 本文の出典である『讃岐典侍日記』は平安時代の日記文学であるが、同じ平安時代の日記文学の中で成立が最も古い作品を、次の①～⑤の中から一つ選びマークしなさい。

46

① 更級日記

② 土佐日記

③ 蜻蛉日記

④ 紫式部日記

⑤ 和泉式部日記